

北海道演習林の鳥類相

二 村 一 男

はじめに

北海道演習林で鳥類相の調査を記録しておくことは、1969年10月より本演習林が鳥獣保護区に設定された意義からも貴重な資料となるばかりでなく、演習林の森林施業及び試験研究の面からも大いに参考になると思われる。

北海道演習林（標茶区）周辺の鳥類相の調査報告は、阿部¹⁾が標茶営林署管内のパイロットフォレスト内で、百武²⁾が弟子屈町川湯付近で、橋本³⁾が釧路管内鳥類観察記録と釧路湿原を中心として、三浦⁴⁾が根室地方について調査した報告がある。

北海道演習林内についての調査は吉村⁵⁾がエゾライチョウについて行った報告があるだけで、他の鳥類に関しては調査されていない。

著者は、1981年から1984年までの3年間鳥類相の調査を行った。北海道演習林および隣接地の釧路川周辺で34科111種が確認できたので報告する。

報告に際して、野鳥の情報などで協力していただいた北海道演習林の職員、また卒業論文のため本演で長期にわたりエゾライチョウを中心に調査を続け、その期間中の観察記録などを提供して下さった帯広畜産大学畜産環境学科の横田寿男氏に謝意を表したい。さらに道東の鳥類全般にわたり資料提供や御指導をしていただいた、標茶町郷土館の豊原熙司氏、日本野鳥の会根室支部の三浦二郎氏、釧路市立博物館の橋本正雄氏、とりまとめに協力をいただいた京都大学演習林の大畠誠一氏に厚くお礼申し上げる。

調査地および調査方法

京都大学北海道演習林標茶区は、国の特別天然記念物タンチョウの生息地として知られる釧路湿原の東北部にあたり、釧路市より東北東約45kmに位置する。面積は、1,443ヘクタールで、地形は、ゆるやかで起伏の少ない丘陵からなり、海拔高は50～140mで周辺は一部を除いてほとんどが牧草地にかこまれている。

林内の小川は、多和川にそそぎ釧路川へと流れている。この地域の年平均気温は、5.5°C程度であるが、夏と冬の気温の較差が大きく、特に冬の気候条件は鳥類の生息に厳しいものと思われる。極低気温は-30°Cに達することがあり、約60日間の真冬日⁷⁾が続く。この低温のため約50cm程度の凍土が形成され、その上に積雪が覆う。付近の沼地や小川のほとんどが結氷し、釧路川の川岸が凍ることもある。春は凍土のため植物の芽吹きが遅く、エゾヤマザクラが咲きだすのは5月下旬頃である。夏は海霧の影響を受け、日照時間の少ない日が多い。

天然林⁸⁾は、ミズナラ、ハルニレ、ヤチダモ、キハダ、センノキ、ケヤマハンノキ、シラカンバなどを主とする落葉広葉樹林からなり、ハシドイ、ツリバナ、マユミ、ヤマグワ、ヤナギ類などの低木類が多い。灌木類は、ヒョウタンボク類、エゾニワトコ、エゾヤマハギなどで林床には、ミヤコザサが優占し、一部にはホザキシモツケの群落も見られる。ハンゴンソウ、ヨブスマソウなどの大型草本が生い茂る林床も認められ、低地にはオオブキ、エゾイラクサなどが優占し、ヤ

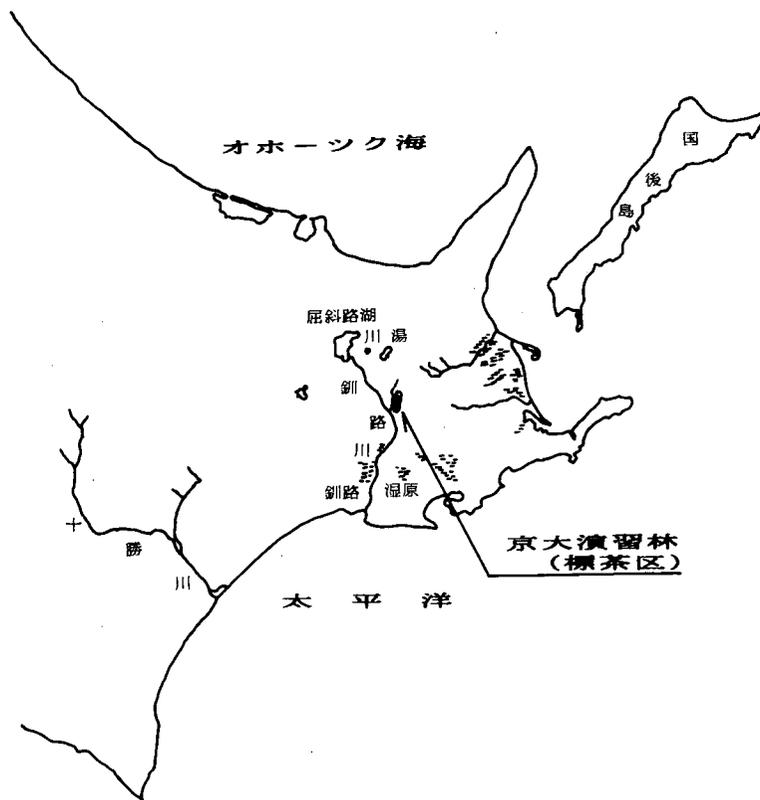


図-1 調査地の位置図

チボウズ（ヒラギシスゲ）が出現する箇所もある。このような天然林のほか、全森林面積のおよそ25%は、カラマツ、エゾマツ、トドマツのほかにはバンクスマツ、ストロブマツ、ドイツトウヒなどの外国産針葉樹類の人工林となっている。本報に記録した鳥類の調査区域は、北海道川上郡標茶町多和の京都大学北海道演習林標茶区を中心としたが、隣接地（多和地区）の釧路川付近のものも、これにつけ加えた。

目録の配列順序は、日本鳥類目録改訂第5版（日本鳥類学会 1974）、和名・学名は、小林によった。観察例の少ないものは、観察年月日を記録し、観察記事をできるだけつけ加えた。

調査結果

北海道演習林の鳥類目録

POICICIPEDIFORMES カイツブリ目

PODICIPITIDAE カイツブリ科

Podiceps ruficollis poggei (Reichenow) カイツブリ

'83年5月29日、多和池で2羽

CICONIIFORMES コウノトリ目

ARDEIDAE サギ科

Ardea cinerea jousi Clark アオサギ

5月のはじめから9月のはじめにかけて、1～3羽(最高6羽)釧路川周辺でみられる。また11林班で東方に通過する個体を観察したことがある。

ANSERIFORMES ガンカモ目

ANATIDAE ガンカモ科

Anser fabalis serratirostris Swinhoe ヒシクイ

3月下旬から5月のはじめの渡去時に多和付近の上空や多和川を遡行する編集飛行(7～30羽)が見られる。近くのシラルト口湖には11月下旬になると渡りの途中の大群(300羽前後)が、渡来する。(天然記念物)

Cygnus cygnus (Linnaeus) オオハクチョウ

構内上空や釧路川付近で3～4羽の家族群を見ることができる。時々、多和川にも採餌にやってくる。初認は、10月6日で渡去時の終認は、4月30日頃である。

Aix galericulata (Linnaeus) オシドリ

‘81年4月28日、多和川で♀各1羽、1. V, ‘83. ♀各1羽, ‘83年5月28日、♂2羽

Anas platyrhynchos platyrhynchos Linnaeus マガモ

3月下旬から6月のはじめにかけて♂のペアを多和川や釧路川などで観察できる。

Anas poecilorhyncha zonorhyncha Swinhoe カルガモ

4月中旬から9月にかけて、多和池や釧路川などで2～3羽見ることができる。また、7月下旬には、幼鳥10羽、成鳥1羽の家族群を観察した。

Anas crecca crecca Linnaeus コガモ

4月中旬から5月のはじめにかけて多和川周辺で♀の2～3羽が観察できる。

Aythya fuligula (Linnaeus) キンクロハジロ

‘82年2月11日、釧路川で3羽

Bucephala clangula clangula (Linnaeus) ホオジロガモ

2月中旬の厳冬期に釧路川で1～8羽観察できる。♂が多い。

Mergus merganser merganser Linnaeus カワアイサ

冬期は、11月から1月下旬にかけて、繁殖期は、4月のはじめから5月のはじめにかけて多和川や釧路川で1～3羽観察できる。‘83年4月11日、8林班で♀を観察した。

FALCNIFORMES ワシタカ目

ACCIPITRIDAE ワシタカ科

Milvus migrans lineatus (Gray) トビ

周年生息する。5月中旬に多和付近のミズナラの大木で営巣する。

Accipiter gentilis fujiyamae (Swann & Hartert) オオタカ

‘83年7月4日、11林班のカラマツ林で営巣し、3羽が巣立ちした。‘83年5月10日、11林班で若鳥1羽、‘83年9月26日、8林班2羽、‘84年1月17日、11林班で1羽

Accipiter gularis gularis (Temminck & Schlegel) ツミ

‘83年5月12日、10林班1羽、‘83年5月20日、♂1羽

Accipiter nisus nisosimilis (Tickell) ハイタカ

‘83年4月18日, 9林班で1羽, ‘83年6月11日から‘83年8月2日, 4林班のカラマツ林で営巣し, 3羽が巣立ちした。‘82年1月11日, 構内で1羽

Buteo buteo japonicus (Temminck Sehlegel) ノスリ

‘81年5月5日, 2林班で1羽, ‘82年6月29日, 7林班で2羽, ‘83年6月12日, 8林班で2羽

Spizaetus nipalensis orientalis Temminck & Schlegel クマタカ

‘81年12月9日, 9林班で1羽, ‘82年4月29日, 7林班で2羽, ‘83年11月1日, 11林班で1羽

FALCONIDAE ハヤブサ科

Falco peregrinus japonensis Gmelin ハヤブサ

‘81年6月1日, 11林班で1羽, ‘81年4月28日, 4林班1羽

Falco subbuteo subbuteo Linnaeus チゴハヤブサ

‘81年6月3日, 構内1羽, ‘83年7月16日, 構内1羽, ‘83年9月10日, 多和1羽

Falco tinnunculus interstinctus Horsfield チョウゲンボウ

‘81年6月3日, 構内2羽, ‘81年2月20日, 釧路川1羽

GALLIFORMES キジ目

TETRAONIDAE ライチョウ科

Tetrastes bonasia vicinitas Riley エゾライチョウ

周年生息し, 4月から11月にかけて林道ぞいで番いの個体がよく観察できる。‘82年7月13日, 林道でヒナ2羽成鳥1羽。

横田¹⁰⁾によれば冬期は, 足跡や雪洞ねぐらが広く分布し, カラマツ人工林に混在するシラカンバの芽を採食するとのべている。

PHASIANIDAE キジ科

Phasianus colchicus versicolor Vieillot キジ

狩猟用に放鳥されたコウライキジで, ‘79年7月, に構内で大畠氏が観察した。

GRUIFORMES ツル目

GRUIDAE ツル科

Grus japonensis (P. L. S. Miillar) タンチョウ

秋になると時々多和付近の牧草地やデントコーンの刈跡に2~3羽が飛来する。

根釧地方の湿原はタンチョウの生息地となっており, 特に釧路湿原は有名である。

(特別天然記念物)

CHARADRIIFORMES チドリ目

CHARADRIIDAE チドリ科

Charadrius dubius Curonicus Gmelin コチドリ

‘82年5月8日, 釧路川で2羽初認する。その後同所で, ‘83年4月29日, 3羽, ‘83年5月2日, 5羽, ‘83年7月3日, 抱卵(卵4個)¹¹⁾, ‘83年7月24日幼鳥1羽, 成鳥1羽を観察

Charadrius placidus Gray イカルチドリ

‘82年2月20日, 2羽, 3月6日, 2羽, ‘83年4月10日, 3羽, ‘83年8月6日, 2羽, いずれも釧路川

SCOLOPACIDAE シギ科

Calidris alpina sakhalina (Vieillot) ハマシギ

‘83年5月12日, 1羽, 釧路川

Tringa erythropus (Pallas) ツルシギ

‘83年5月12日, 1羽 (夏羽)

Tringa glareola Linnaeus タカブシギ

‘83年5月12日, 1羽

Tringa brevipes (Vieillot) キアシシギ

‘81年9月14日, 多和で6羽通過, ‘82年5月8日~6月5日, 釧路川で1羽~5羽観察, 春と秋の渡りのシーズンに観察できる。

Tringa hypoleucos Linnaeus イソシギ

5月はじめに渡来し, 多和川や釧路川周辺で1~8羽観察できる。時々幼鳥も見ることがある。

Scolopax rusticola Linnaeus ヤマシギ

4月中旬になると沢すじや林道わきから飛び立つ, ‘82年5月18日, カラマツ林で抱卵中の個体を観察する。

Gallinago hardwickii (Gray) オオジシギ

4月20日前後に渡来し, 5月から6月はじめにかけてフライトディスプレイでよく鳴く。この地方でカミナリシギの名で親しまれている。

LARIDAE カモメ科

Larus ridibundus sibiricus Buturlin ユリカモメ

‘81年11月7日, 15羽, ‘83年4月10日, 8羽, 構内で通過個体を観察

Larus tridactylus pollicaris (Ridgway) ミツユビカモメ

‘84年1月3日, 14羽の通過個体, 多和

Sterna hirundo longipennis Nordmann アジサシ

‘81年10月4日, 構内でハシブトガラスに捕食された1羽を観察

COLUMBIFORMES ハト目

COLUMBIDAE ハト科

Streptopelia orientalis orientalis (Latham) キジバト

4月はじめに渡来し, 9月中旬頃まで見られる。

Sphenurus siboldii sieboldii (Temminck) アオバト

6月上旬から9月下旬にかけて鳴声をきく, ‘83年9月1日, 11林班で20羽, ‘83年9月12日, 10林班で50羽の通過個体を観察する。

CUCULIFORMES ホトトギス目

CUCULIDAE ホトトギス科

Cuculus canorus telephonus Heine カッコウ

5月20日すぎに渡来し, 電線などにとまってよく鳴く。ちょうどこの頃この地方では豆播きのシーズンとなる。

Cuculus saturatus horsfieldi Moore ツツドリ

カッコウよりやや早い5月中旬に渡来し, 7月中旬頃まで鳴声をきく。

STRIGIFORMES フクロウ目

STRIGIDAE フクロウ科

Otus scops japonicus Temminck & Schlegel コノハズク

5月中旬頃渡来し、6月下旬まで鳴声を聞くが数はひと番いくらいである。多和の町有林には定期的に渡来している。

Strix uralensis hondoensis (Clark) フクロウ

周年生息する数は少ない。3林班、6林班、11林班で昼間観察した。また構内で夜間鳴声を聞くこともある。めぐらで採集したペリット（不消化物）の内容物を調べたところエゾヤチネズミの頭骨がほとんどで、エゾトガリネズミが1個、オオアシトガリネズミが2個であった。また小型のキツツキの嘴と種不明の鳥の嘴と骨が見つかった。

APODIFORMES アマツバメ目

APODIDAE アマツバメ科

Chaetura caudacuta caudacuta (Latham) ハリオアマツバメ

5月20日頃渡来し、9月下旬まで2～8羽飛びかうのを観察できる。樹洞性であるため林内に多いミズナラの暴れ木は絶好の営巣木であろう。

CORACIFORMES ブッポウソウ目

ALCEDINIDAE カワセミ科

Ceryle lugubris lugubris (Temminck) ヤマセミ

多和川や釧路川周辺で周年生息する。

Alcedo atthis bengalensis Gmelin カワセミ

5月はじめから8月下旬まで多和川や釧路川で観察できる。釧路川の土手が営巣地になっている。

PICIFORMES キツツキ目

PICIDAE キツツキ科

Jynx torquilla japonica (Bonaparte) アリスイ

4月下旬から5月はじめに多和にひと番いが渡来する。'82年7月4日、構内のハルニレの門柱のうろに営巣し、'82年7月17日、4羽が巣立ちした。

Picus canus jessoensis Stejneger ヤマゲラ

周年生息するが数は多くない。冬にはエサ台によくやってくる。'82年7月13日、構内で幼鳥を3羽観察する。

Dryocopus martius (Linnaeus) クマゲラ

4月はじめに初認し、12月にかけて観察できるが、数はきわめて少ない。'83年5月24日および'83年12月13日に8林班ミズナラ、2林班ハルニレ、10林班ミズナラの暴れ木と立枯木の採餌木で採集した排せつ物の内容を調べたところ、ほとんどムネアカオオアリであった¹²⁾。このように林内に多いミズナラの暴れ木がクマゲラの重要な採餌木になっている。

1982年6月26日に4林班のハルニレの立枯木で営巣し、少なくとも2羽のヒナが巣立ちした¹³⁾。真冬は、'84年2月22日、8林班で♂1羽の横田氏¹⁰⁾の1例がある。(天然記念物)

Dendrocopos major hondoensis (Kuroda) アカゲラ

周年生息し比較的良好に観察できる。枯木で営巣しエサ台によくやってくる。

Dendrocopos leucotos stejnegeri (Kuroda) オオアカゲラ

周年生息するがアカゲラより少ない。枯木で営巣する。

Dendrocopos minor amurensis (Buturlin) コアカゲラ

周年生息するが数は少ない。細いヤナギやヨシにとまって採餌することがある。冬は、エナガ、ハシブトガラ、キバシリ、ゴジュウカラなどの群れといっしょにいることもある。

Dendrocopos kizuki seebohmi (Hargitt) コゲラ

周年生息するが数は多くない。

PASSERIFORMES スズメ目

ALAUDIAE ヒバリ科

Alauda arvensis japonica Temminck & Schlegel ヒバリ

4月はじめに渡来して、多和付近の牧草地や河川敷でよくさえずる。

HIRUNDINDAE ツバメ科

Riparia riparia ijimae (Lonnberg) ショウドウツバメ

5月下旬から6月にかけて構内や釧路川の河川敷でよく見られる。火山灰土の根釧地方では、営巣地に適していて各所でコロニーを見ることができる。

Hirundo rustica gutturalis Scopoli ツバメ

‘81年4月10日、標茶市街地で1羽、‘81年4月30日、ガレージに1羽が飛び込み保護した。

‘81年5月31日釧路川でショウドウツバメと混群、‘83年4月10日、2羽、‘83年5月15日、2羽、釧路川

MOTACILLIDAE セキレイ科

Motacilla cinerea robusta (Brehm) キセキレイ

‘81年9月14日、多和川で1羽、‘83年7月24日、釧路川で1羽観察

Motacilla alba lugens Gloger ハクセキレイ

3月20日頃渡来し、橋桁などで営巣する。9月中旬には幼鳥をよく観察する。釧路川で少数が越冬している。

Motacilla grandis Sharpe セグロセキレイ

‘83年7月25日、釧路川で成鳥1羽と幼鳥2羽を観察しているので繁殖の可能性がある。2月の厳冬期に釧路川で1羽観察している。

Anthus hodgsoni hodgsoni Richmond ビンズイ

5月のはじめに渡来し、林道ぞいでよく見る。9月下旬に渡去する。‘83年7月8日、11林班の林道わきで営巣した。

Anthus spinoletta japonica Temminck & Schlegel タヒバリ

‘81年5月3日、4林班付近の牧草地で30羽、‘83年4月16日、釧路川で夏羽個体1羽、‘84年1月21日、釧路川で1羽。

PYCNONOTIDAE ヒヨドリ科

Hypsipetes amaurotis amaurotis (Temminck) ヒヨドリ

おもに冬鳥で1~3羽が時々観察されるほか、‘82年5月8日、構内で1羽、‘83年5月3日、構内で1羽。三浦ほかは、夏の分布は、十勝地方は普通で、釧路地方は稀、根室地方での夏の記録はないとのべている。

LANIIDAE モズ科

Lanius bucephalus bucephalis Temminck & Schlegel モズ

4月中旬に♂で構内や林内の造林地に渡来するが数は少ない。'83年5月29日、多和川で昆虫のはやにえを観察する。

BOMBYCILLIDAE レンジャク科

Bombycilla garrulus centralasiae Poliakov キレンジャク

'83年2月16日、標茶市街地で街路樹のナナカマドの実を食べに20羽やってきた。

TROGLODYTIDAE ミソサザイ科

Troglodytes troglodytes fumigatus Temminck ミソサザイ

4月下旬から7月中旬にかけて谷筋でさえずりを聞く、あまり多くない。

MUSCICAPIDAE ヒタキ科

TURDINAE ツグミ亜科

Erithacus calliope (Pallas) ノゴマ

'83年7月9日、多和の牧草地で♂1羽、'83年7月24日、釧路川♂1羽、'83年7月25日、'83年8月3日、8月25日、♂1羽構内で観察。'84年6月、4林班と10林班で横田氏¹⁰⁾が各1羽観察している。

Erithacus cyane (Pallas) コルリ

5月中旬すぎから7月にかけて林内の沢筋でさえずりを聞くが多くない。

Saxicola torquata stejnegeri (Parrot) ノビタキ

4月中旬すぎに牧草地や釧路川の河川敷、釧網線の土手などでよく観察できる。この地方でヂッチの名で親しまれている。

Zoothera dauma aurea (Holandre) トラツグミ

4月中旬に渡来、構内や林内で鳴声を聞くが数は多くない。

Turdus chrysolaus Temminck アカハラ

4月20日すぎに渡来し、構内や林内で早朝と夕方によく鳴く。'81年5月18日、14羽、'83年4月29日、20羽、構内の芝生で採餌する小群を観察する。

Turdus naumanni eunomus Temminck ツグミ

10月中旬の一時期になると10~50羽の小群で渡来し移動する群れを観察する。12月から3月にかけて構内や釧路川の河原で10羽くらいが越冬する。

SYLVIINAE ウグイス亜科

Cettia diphone cantans (Temminck & Schlegel) ウグイス

4月中旬に初鳴が聞かれ、7月中旬までよく鳴く。

Locustella fasciolata (Gray) エゾセンニュウ

夏鳥のうちでも渡来は遅く、5月下旬から6月にかけて夕方や夜間鳴声をよく聞く。

Locustella ochotensis ochotensis (Middendorff) シマセンニュウ

'82年6月12日、構内で夜間鳴声を聞く。'83年7月25日、釧路川の草地で2羽、三浦⁵⁾によれば道東は海岸部に多く、内陸部は稀。

Locustella lanceolata (Temminck) マキノセンニュウ

5月の中旬に渡来する、広葉樹林で鳴声をきくが多くない。鳴声がヤブサメに似る。

Acrocephalus bistrisiceps Swinhoe コヨシキリ

5月下旬に釧路川の河川敷に渡来し、よくさえずる。

Phylloscopus tenellipes Swinhoe エゾムシクイ

5月のはじめに渡来し、7月中旬にかけてよく鳴く。

Phylloscopus occipitalis coronatus (Temminck & Schlegel) センダイムシクイ

5月のはじめに渡来し、8月のはじめにかけてよくさえずる。エゾムシクイより多い。

Regulus regulus japonensis Blakiston キクイタダキ

11月終りから3月中旬にかけて、カラマツやアカエゾマツの造林地でハシブトガラやキバシリ、エナガなどと混群になるが数はきわめて少ない。

Muscicapa narcissina narcissina Temminck キビタキ

5月20日すぎに渡来し、7月中旬にかけてさえずるが数は少ない。

Muscicapa cyanomelana cyanomelana Temminck オオルリ

渡りの途中と思われる個体を、'84年6月14日、横田氏¹⁰⁾が1羽観察している。

Muscicapa sibirica sibirica Gmelin サメビタキ

'81年6月4日、11林班で1羽、'81年6月11日、11林班で1羽

Muscicapa latirostris Raffles コサメビタキ

'81年6月3日、11林班でサルオガセのついたミズナラで4羽、'81年6月9日、11林班で1羽、'83年6月1日、構内でシラカンバの花穂を採餌する4羽を観察。

Aegithalos caudatus triuirgatus (Temminck & Schlegel) エナガ

北海道型の亜種でシマエナガ。周年生息し、秋から冬にかけてハシブトガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラなどと10~20羽くらいの混群となる。

PARIDAE シジュウカラ科

Parus palustris hensoni Stejneger ハシブトガラ

周年生息し、数は多く秋から冬にかけてエナガと混群となる。冬にエサ台によくやってくる。

'81年4月29日、多和川でヤナギの花穂を食べていた。

Parus ater insularis Hellmayr ヒガラ

周年生息し、5月中旬頃によくさえずる。冬にエサ台に5~6羽でやってくる。'83年5月20日、多和でヤナギの花穂を食べていた。

Parus varius varius Temminck & Schlegel ヤマガラ

林内に針葉樹林が少ないせいか、ごく稀で'84年6月12日、4林班で1羽、'84年5月11日、10林班で1羽、いずれも横田氏¹⁰⁾が観察している。

Parus major miner Temminck & Schlegel シジュウカラ

周年生息するのがハシブトガラより少ない。秋にカラマツの実を食べる。

SITTIDAE ゴジュウカラ科

Sitta europaea amurensis Swinhoe ゴジュウカラ

北海道型の亜種でシロハラゴジュウカラ。比較的多く、冬はエナガと混群となる。下尾筒が茶褐色であることからこの地方でケツクサレの名で親しまれている。

CERTHIIDAE キバシリ科

Certhia familiaris japonica Hartert キバシリ

北海道型の亜種で下腹部が淡いキタキバシリ。周年生息するが多くない。冬はエナガ、ハシブトガラ、ゴジュウカラなどと混群となる。

EMBERIZIDAE ホオジロ科

Emberiza cioides ciopsis Bonaparte ホオジロ

'82年3月27日、多和で♂4羽、'82年4月14日、多和で♂3羽を観察したがこれは渡りの途中と思われる。

Emberiza fucata fucata Pallas ホオアカ

‘81年6月6日、多和の牧草地で3羽、‘81年6月29日、多和の牧草地で3羽、‘83年7月16日、11林班界の牧草地で♂1羽。

Emberiza aureola omata Shulpin シマアオジ

‘83年5月29日、鉏路川の河川敷で♂1羽、以降同年8月4日まで最高♂3羽を確認、エサを運んでいたのでは繁殖していると思われる。

Emberiza spodocephala personata Temminck アオジ

4月20日すぎくらいに渡来し、多和川などの川すじや林縁部でよく観察できる。‘82年1月24日、多和の牧場で越冬個体1羽を観察。

Emberiza variabilis Temminck クロジ

‘81年5月17日、事務所の窓ガラスにしょう突死した個体♂1羽、♀1羽、渡り途中の個体と思われる。

Emberiza schoeniclus pyrrhulina (Swinhoe) オオジュリン

‘82年5月8日、鉏路川の河川敷で♀2羽。

FRINGILLIDAE アトリ科

Fringilla montifringilla Linnaeus アトリ

‘82年1月22日～3月22日まで鉏路川や構内で雪の上に出たアカザなどの実を採餌。‘83年3月12日、多和で5羽地上で採餌。

Carduelis sinica minor (Temminck & Shlegel) カワラヒワ

周年生息するが冬期は数が少なくなる。2月下旬に牧草地で採餌する50羽を観察。‘82年5月8日、構内で5羽がカラマツの新芽を食べていた。

Carduelis spinus (Linnaeus) マヒワ

渡りの途中とみられる群れが、‘81年4月22日、多和川で7羽、‘82年3月10日、1林班で100羽、‘82年3月29日、11林班で70羽いずれもケヤマハンノキの実を食べていた。

Acanthis flammer flammea (Linnaeus) ベニヒワ

‘82年12月8日、構内でイスカ8羽にまじる1羽を初認し、‘83年4月6日の終認まで10羽～100羽くらいの群れでカラマツやドイツトウヒ、ケヤマハンノキ、ナギナタコウジュ、アカザなどの実を採餌していた。

Leucosticte arctoa brunneonucha (Brandt) ハギマシコ

‘83年2月7日、構内の休憩所のヒサシをねぐらにしていた1羽を観察、以来同年4月13日まで構内で2～12羽を観察した。

Loxia curvirostra japonica Ridgway イスカ

‘82年11月23日、♂1羽が事務所の窓ガラスにしょう突死した。‘82年11月28日から‘83年4月6日にかけて構内で6～30羽の群れでカラマツ、ドイツトウヒ、ヨーロッパアカマツの実を採餌していた。

Uragus sibiricus sansuinentus (Temminck & Shlegel) ベニマシコ

4月中旬に渡来し、林道ぞいや川ぶちのホザキシモツケなどのやぶでよく見かける。

Pyrrhula pyrrhula griseiventris Lafresnaye ウソ

11月はじめに渡来するが数は少ない。

Eophona personata personata (Temminck & Schlegel) イカル

‘83年5月3日、10林班で2羽観察し、夏期は1～6羽程度林内で観察できる。鉏路地方では少ないようである。

Coccothraustes coccothraustes japonicus Temminck & Schlegel シメ

4月はじめに渡来(夏羽)し、7月にかけて1~3羽くらい観察できるが、少ない。

PLOCEIDAE ハタオリドリ科

Passer rutilans rutilans (Temminck) ニュウナイスズメ

4月下旬から5月はじめにかけて渡来すが多くない。カラマツの花芽やヤチダモの花を食べていた。

Passer montanus saturatus Stejneger スズメ

構内に周年生息し、ガレージや倉庫などに営巣する。厳冬期には、近くの酪農家の牛舎が絶好の越冬地になっている。

STURNIDAE ムクドリ科

Sturnus philippensis (Forster) コムクドリ

5月はじめに渡来し、アカゲラの古巣で営巣し、6月頃になると20~50羽の群れを見る。

Sturnus cineræus Temminck ムクドリ

コムクドリより早く4月はじめに渡来し、ミズナラのうろなどで営巣する。冬にごく一部が(40~50羽)釧路川ぞいで越冬している。

CORVIDAE カラス科

Garrulus glandarius japonicus Temminck & Schlegel カケス

北海道型の亜種でミヤマカケス。

構内や林内でよく見かける。冬にエサ台によくやってくる。

Corvus corone orientalis Eversmann ハシボソガラス

周年生息し、構内や防風林のカラマツで営巣する。1月に多和の牧場の堆肥に集った50羽の群れを観察した。

Corvus macrohynchos japonensis Bonaparte ハシブトガラス

周年生息するが、数はハシボソガラスより多い。

考 察

北海道演習林および隣接地で、32科111種もの鳥類を記録できたことは、標茶区を中心とする広葉樹の天然林と釧路川周辺の環境が鳥類の生息、繁殖及び渡りの休息地として重要な役割を果たしていることがうかがえる。

とくに、クマタカ、オオタカ、ハイタカ、アオバト、コノハズク、フクロウ、ハリオアマツバメ、クマゲラ、ノゴマ、コルリ、ツグミ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、キビタキ、シマアオジ、イカルなどが観察されたことは広葉樹林の林相の豊かさを示しているといえる。

またエゾマツ、トドマツなどの針葉樹林を好むヤマガラ、ヒガラ、キクイタダキが少ないことは、もともと標茶区には天然の針葉樹はなく、¹¹⁾近年になって林種転換によりエゾマツ、トドマツ、ドイツトウヒ、カラマツなどを造林している状況と、これらの林がまだ幼令林のためと思われる。今後成木林に達した場合ヤマガラなどが侵入し、周年生息する可能性があろう。

ちなみに隣接地の弟子屈町川湯周辺で調査された百武³⁾によれば、ヒガラ、キクイタダキは周年生息し、ヤマガラは6~7月を除いて生息している状況である。

この地域でのコガラの生息に関しては、著者が特に留意した点であった。この種類の標茶区での生息は可能であるが、野外で姿による識別は困難で、生息確認の方法としては、さえずりによる方法が唯一であろう。

百武³⁾は、川湯の針葉樹の多い地域でコガラとハシブトガラを観察しており、本演習林でも繁殖期などの一時期は渡来の可能性もある。

シマフクロウは、北海道東部の一部にわずか生息している大型のフクロウで絶滅の危機にあり、1981年に環境庁の特殊鳥類調査で日本野鳥の会が行った委託調査¹⁰⁾によるとその数は道東でもわずか5羽であった。

かつて多和川が改修される以前は、シマフクロウの餌となるサケやマス、イトウなどの魚類も多く、シマフクロウの姿を目撃した話を聞いたことがある。1981年10月23日の夜間に、5林班と8林班を中心にシマフクロウの鳴声の調査に同行したが確認できなかった。

標茶区に生息している鳥類のうち特筆すべきものとして、ワシタカ類の繁殖があげられる。クマタカは林内のミズナラとダケカンバの暴れ木が営巣木として利用され、林内と周辺の牧草が採餌地となっている。オオタカとハイタカは、造林したカラマツが成林木（約20年生）となった林分を営巣地として利用している。

コノハズクは、定期的な渡来地として釧路、根室地方では珍しく、周年生息しているフクロウは、うろのあるハルニレやハンノキなどをねぐらとして利用し、エゾヤチネズミを捕食している。両種とも繁殖の可能性もある。アオバトは、夏季の生息個体数も多く、イカルは、この付近では数が比較的多い。

標茶区の森林の特徴として、林内に点在するミズナラの暴れ木は、ハリオアマツバメの営巣木となり、クマゲラの採餌木として利用されている。

ハルニレなどの立枯の大径木は、クマゲラのねぐらや営巣木として特に重要な存在である。

隣接地の釧路川周辺の河川敷は、草原性のノゴマ、シマアオジ、コヨシキリなどが繁殖し、釧路川の砂礫地は、コチドリ¹¹⁾、イカルチドリの繁殖地となっている。

記録した111種の鳥類を大別してみると、留鳥は約22%、冬鳥は約17%、旅鳥は約11%、夏鳥は約50%となった。

道東の内陸部に位置する標茶区およびその付近の鳥類は、季節的に著しく変動する特徴がある。春から夏にかけての繁殖期およびその前後の季節には、種類と個体数共に著しく多いが、冬季には、不定期に渡来する冬鳥を除けばシジュウカラ科、エナガ科、ライチョウ科などの留鳥約16種程度になる。冬期の鳥類相の著しい低下は、野鳥の採餌に関連する。厳寒期には実をつけている樹木はきわめて少なく、厚い土壤凍結のために、土壤内の生物を採餌することは不可能となり、さらに50cm程度の根雪は、地表の餌を利用することすら困難にする。このために、この季節に森林に生息する鳥類は樹上の餌を利用する種類か、フクロウのようにネズミなどを捕食する鳥に限られる。

冬期における鳥類の生息状況は、留鳥のシジュウカラ、ハシブトガラ、ゴジョウカラ、エナガ、キバシリ、コゲラなどが混群となり樹林を漂行している。一般に不定期な冬鳥として知られるベニヒワ、イスカは、50～60羽の群れでカラマツの実に集って採餌し、イスカは、構内にあるヨーロッパアカマツの球果を器用に嘴で割って実を食べていた。また、アトリやベニヒワは、ハンノキの実や雪の上に出ているナギナタコウジュやアカザの実を採餌することが多かった。ツグミは、10月中旬の一時期10～50羽の群れで渡来し、広葉樹林内で休息し移動して行く。実のなる樹木が少ないせいか越冬はしない。しかし、わずか構内や釧路川の河原などで越冬する個体もある。スズメは留鳥だが厳冬期になると構内で採餌できないためいなくなってしまう。多和周辺を観察した結果、近くの酪農家の牛舎に集っていた。このことは餌が豊富なうえ、ねぐらにも好都合だからであろう。

凍結しない多和川や釧路川は、オオハクチョウやホオジロガモ、キンクロハジロなどのカモ類が越冬にやってくる。

また構内に冬場エサ台を設けブタの脂身を置いてやると貪欲なハシブトガラスをはじめミヤマ

カケス、ゴジュウカラ、シジュウカラ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラなどが採餌にやってきて私たちの目を楽しませてくれる。

このように標茶区の森林は鳥類にとって重要な生息地であることがいえる。とくに生息する鳥類の約50%を占める夏鳥の繁殖地としての森林の役割は大きい。

今後、クマタカ、クマゲラ、フクロウなどの営巣および採餌木として重要なミズナラなどの暴れ木や立枯木のハルニレについても森林施業に支障のない限り残存木として取扱う必要があろう。

引用文献

- 1) 阿部永：Ⅵ鳥類，パイロットフォレスト造成に伴う環境の変遷，帯広営林局．117～113，1975
- 2) 百武充：川湯周辺の鳥—2年半の記録—野鳥だより—北海道．**26**．2～6，1977
- 3) 橋本正雄：釧路管内鳥類観察記録(1)．—1971～1980—釧路市立郷土博物館紀要第8輯．47～58，1981
橋本正雄：釧路管内鳥類観察記録(2)．—1971～1980—釧路市立郷土博物館紀要第9輯．9～18，1982
- 4) 橋本正雄：釧路湿原の鳥獣類．釧路湿原総合調査報告書．277～290，1975
- 5) 三浦二郎・高田勝・黒沢信道：根室地方の野鳥．根室自然教育研究会会誌別冊．1981
- 6) 吉村健次郎：京都大学北海道演習林鳥獣保護区の狩猟鳥獣について—主としてエゾライチョウの生態と生息数—．
北方林業**23**(6)．181～183，1971
- 7) 竹内典之・大窪勝・古本浩望・大牧治夫：標茶の気象．京大演集報．**15**．35～42，1982
- 8) 岡本省吾：京都大学農学部北海道演習林植物目録．京大演報．**25**．35～80，1956
- 9) 小林桂助：原色日本鳥類図鑑．保育社．大阪：pp248，1956
- 10) 横田寿男：北海道東部標茶地方の鳥相とエゾライチョウの分布および冬期の行動圏．帯広畜産大学畜産環境学科野生動物管理学研究室卒業論文．1985
- 11) 二村一男：釧路川中流域のチドリについて．釧路市立博物館々報．**286**．93～94，1984
- 12) 二村一男：京都大学北海道演習林におけるフクロウ，クマゲラならびにアメマスの摂食について．
釧路市立博物館々報．**287**．101～104，1984
- 13) 飯島一雄・川口善正・菊地浩・諏訪良光・豊原熙司・二村一男・浦坂周一：標茶町の天然記念物．9～10，1984
- 14) 大島誠一：根釧地方の広葉樹林の種構成について．日林北海道支部講演集．**29**．67～70，1980
- 15) 財団法人日本野鳥の会：特殊鳥類調査．環境庁．1～16，1982．